The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	インクルージョンと共生をめぐって
Author(s)	渥美, 公秀; 石塚, 裕子; 山本, 晃輔 他
Citation	未来共創. 2020, 7, p. 152-160
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76154
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

座談会

インクルージョンと共生をめぐって

特集「インクルージョンと共生」の執筆にあたって、未来共創センターでは研究会を開催し、相互に意見を交わしてきました。「インクルージョン」や「共生」といった時にそれぞれが向き合っている課題は様々です。特集に寄稿する著者の皆さんにお話をうかがいました。

2020年2月3日（月）に未来共創センターで2回にわけてお聞きしたものを再構成しています。

出席者

渥美公秀 大阪大学大学院人間科学研究科教授

石塚裕子 大阪大学大学院人間科学研究科特任講師

山本晃輔 大阪大学大学院人間科学研究科講師

木村友美 大阪大学大学院人間科学研究科講師

寺村晃 大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程

聞き手

織田和明 大阪大学大学院人間科学研究科特任研究員／博士後期課程

インクルージョンとは、共生とは

織田： 寺村さんの論文ではフィリピンの知的障害者の事例をあげていらっしゃいましたが、インクルージョンと共生についてどのようにお考えですか？

寺村： インクルージョンを考えるに際しては当事者の視点に重点をおきました。当事者がそれぞれに役割を持ち、個性を認められ、特性を発揮できている。そしてこの場所にいてもいいんだという帰属意識を持っていられる状況がインクルージョンされているということだと考えてい

ます。共生の場合はもっと「当事者をふくむ地域住民」が主体になってくるのかなと思います。

織田：山本先生は、教育現場におけるインクルージョンについてどのように考えられましたか？

山本：マジョリティ世界にマイノリティをインクルージョンすることは政治的です。特に教育の世界では必ずしも一方向的ではない。例えば外国人をインクルードするというときには文化やアイデンティティを守りながら包摂することが重要になる。必ずしもマジョリティに「なる」ことが目的にはならない。

では「外国人」であることを認めるという「承認」はどのようなものになるか。外国人らしくしていいよと教育現場で語るにしても、「外国人」と見られたくないという子もいる。積極的に「日本人」になろうとする子もいることを、本人の意志ならそれで良いとするのか。そのようなときに、インクルージョンはどうあるべきか。インクルージョンは「する側」の主体に注目されますが、「される側」の主体をそこに織り込むことも考えなければならない。インクルージョンはときに明確な目標や良いもののように捉えられますが、それが独りよがりになってはいけない。

寺村：主体性の問題には悩みました。当事者を誰にするのか、何にインクルージョンするのかという視点で話の展開が変わっていくので、立場や状況をとらえることが難しいですね。

石塚：私は排除されている状態というのはカテゴリーが固定化している状態だと思うので、カテゴリーが流動する状態であるならば、インクルージョンがある社会と言えるのではないでしょうか。すべての人を包摂するというのはありえないですよね。どこかでインクルージョンされたらどこかでエクスクルージョンされる。そのエクスクルージョンされるカテゴリーが固定化しないことが大切だと思います。「こういう状態がインクルージョンである」というものはないと考えます。カテゴリーを固定化させないための活動の多様性や、主体の多様性をどう担保するのか、その方法や場のつくり方が、まちづくりには求められていると思います。

渥美：インクルージョンって言った時に、その人の存在を認めるというのが第一だと思うんです。それを呪文として言うことはできますが、具体的にどう考えたらいいのか。多くの人は属性、カテゴリーで見ると思います。高齢者は入っているか、とか何々障害の人は入っているかですね。それがダメということはないけれど、石塚先生がおっしゃるように属性やカテゴリーが固定してはいけない。論文では、ファンクション（機能）に注目した方がいいこともあるのではないかということでAFN（Access & Functional Needs）を出しました。災害時に、自分は眼鏡を落としたら一気に目が不自由になります。今、この状況において目が見えていない、つまりファンクションが働いていないということです。50代の男性といった属性やカテゴリーで固定的に見るのではなくて機能で見ていく方法もあるんじゃないかということでAFNに注目したんです。高齢者とか視覚障害者といった「カテゴリー」で見るのではなくて、「今、これができない」っていうくくりで見ようということです。

石塚：人の分類ではなく、困りごとの分類で考えるということですね。
災害時の方が日常よりも多様な困りごとが発生するので、人のカテゴ

リーで考えていては対応できない。同じカテゴリーであれば同じ困りごとを抱えているというわけでもないし、ある困りごとを抱えている人は様々なカテゴリーに散らばっている。だからファンクションで考えようということですね。

変容のための「場」

織田：変容というのが寺村さんの論文でひとつ重要なポイントだったと思います。障害者の方が変容していく、地域も変わっていく、という点です。

寺村：そうですね、さっき石塚先生がお話された「固定化されない」という点でいうと、私が見てきたフィリピンの事例でも固定化されない「役割」というのもあったと思います。同じハコモノのなかにいても、あるときは支えられるときもあれば、あるときはそれを支えにしながら活動の範囲をひろげていく、そうすることによって地域のほうに出て行く、という役割の変容が着目すべき点でした。

石塚：まず大事なのは、寺村さんの事例でバビタハウスが「空港のハブみたいになっている」ということだと思います。バビタハウスのようなベースとなる部分がないと、変容というのはなかなかうまれてこない。バビタハウスは、私が書いた図（人と人のつながりとインクルージョン、本誌 94 ページ）の第三世代であり、バビタハウスがあるから地域との交わりや次の関係がうまれているのだと思います。そのような場がまだない人たちがたくさんいるので、最近いろんな「居場所」が生まれてきています。

寺村：フィリピンのこの事例だけでなく他の障害者のことでもいえることですが、一方ではある特定の居場所に依存しつづけることが問題になっています。そこにしか自分が自分で居られる場所がない場合は、その時はその場所でインクルージョンされているのですが、そこから外に出て行ったときには居場所がなく、エクスクルージョンになってしまいます。

石塚：そうですね。日本の福祉制度は福祉のサービスで人を囲い込んでしまうので、同じ地域にいながら、その人が見えない（認識されていない）状況になっている。この点は反省しないといけません。地域で共に生きている状況にはなっていない。だから、ベースとなる場をつくるのは大事だけれど、その場だけで固定化しないということが大切なように思います。

木村：福祉の制度がインクルージョン・エクスクルージョンを生むという点は高齢者の介護保険制度も同様です。制度改正によって、要支援（介護レベル）に認定された高齢者がデイサービスに通えない状況が起こり、一方で要介護高齢者はこれまでどおりデイに通うので、要支援の方は地域に取り残されてしまいました。ある地区で出会った高齢者の方が「（地域のなかに）昼間は人が誰もおらん」って言っていた事例はすごく印象的でした。高齢者を支えるための制度が、固定的なエクスクルージョンを生んでしまっていることがあります。

渥美：原理的にはインクルージョンすればエクスクルージョンが必ず伴います。そのこと自体は問題なのではないというか、仕方がない。平面に線を引くようなものです。現実に「誰もが一人残さず」をしようと思ったら時間の軸をいれるしかないと思います。ある時はインクルージョンされ、ある時はエクスクルージョンされ。現場ではエクスクルージョンされた人に注目して支援していくNPOがいて。現場ではトライアンドエラーでやってみて、あかんかったらまた別のやり方でやってみて、そうやっていかないと。

インクルージョンのとまどい

織田：教育、特に外国人教育の分野で活動されている山本先生はまた見えているものが違うと思うのですが、いかがでしょうか。

山本：基本は福祉と同じで、教育も子どもたちのために一生懸命やっているんです。ただ外国人教育を考えるともっと複雑で、在日朝鮮人の子にむきあう在日朝鮮人の先生にもとまどいがある。教育の現場では教え

る側と教えられる側、福祉の現場では与える側と受ける側という、それこそ流動しない「構造」がある。その構造の中ではある種の行いが「良きこと」として固定化している。しかし実際にはそれが誰にとっても「良い」わけではない。だから現場ではとまどいがある。

外国人の教育・社会運動に関しても「ナショナルなもの」「ナショナルな制度」が厳然としてあって、他方で「ナショナルではないひとたち」がいる。そうしたひとたちのエスニシティやアイデンティティを「彼ら」として対象化しつづけている。彼らは、わたしたちではない。それが、彼らの独自のコミュニティの力をうながし、自己決定権を保つことにつながっているのは間違いないが、それゆえに何十年も何十年もつねに彼らでありつづける。メインストリームではないことの意味や意義をいまいち、紐解けないですね。

寺村：ぼくの分野で当事者っていうのは大抵の場合障害者を指しますが、山本先生のお話を聞くと教育でだれを当事者としてみるのかは難しく感じます。ぼくの論文では当事者は障害者ととらえて、その当事者が帰属意識を実感して能力を発揮できるというのを、インクルージョンの着眼点としました。

石塚：まちづくりの現場では、倉敷市真備町の事例のようにリアルな場面でカテゴリーに変化が起こり、インクルーシブな社会に変容する可能性を感じます。しかし、山本先生がおっしゃるように、メインストリームが長年変化しない問題では、カテゴリーの流動化というだけでは片づけられないものもあると思います。インクルージョンと共生について自分なりに考えると、インクルージョンというのはあくまでも人と人との関係性だと思っています。さらに共生となるとそこに国や地域といった空間の概念を加えて、共にどう生きるかということを考えないといけない。実空間では、今を生きる人と人の関係性だけでなく、その場のもつ歴史や慣習が存在し、今を生きる当事者同士の関係性だけでは解決できないものも含めて、どう共に生きるかが問われているようで難しいと思います。

織田：渥美先生の論文で印象的だったのが「誰もが一人残さず」というフレー

ズです。言葉としてはちょっと重なっている感じもあるけれど、あえて使っていらっしゃるところに渥美先生の強い思いが見えます。

渥美：そこの語感としては any person というだけでなく each and every person と言いたいということですね。現実にはやはり「誰もが一人残さず」というのは無理かもしれません。しかし、それを無理だと言ってしまっては始まらない。想いとして持ち続けたい。先ほど述べたように、インクルージョンは承認だとか、インクルージョンにはエクスクルージョンが伴うとか、それはわかる。しかし、それだけでは助けにならない。目の前の困っている人々に、カテゴリーを固定せず、失っているファンクションに対応して、向き合っていく。一人も残すことなく。

これからのインクルージョンと共生のかたち

織田：これからのインクルージョンと共生のかたちについては、どのようにお考えでしょうか。

寺村：つながりの構築、再構築をしていくことが重要と考えています。そのために、お互いのことを知る過程が必要だと思います。フィリピンの事例においても、当事者が日々の挨拶や物々交換、スポーツ、参加型イベントなど作業活動の共有を住民と積極的にしていました。結果、何人かの住民からは、知的障害を意識して施設のメンバーと関わっておらず、友達として関わっているという発言もありました。今後は、障害者を含む住民という視点で地域活動をとらえていく必要があると思います。

石塚：まちづくりにおけるインクルージョンとは、ひとりひとりが認められる場を持ち、様々なカテゴリー間の緩やかな連帯やカテゴリーそのものが変化する場を、まちづくり活動として創ることだと思います。そして「地域」という実空間で共に生きるために、何を継承し、何を変容させていくのか、動的で多様なカテゴリーで構成される市民が自律的に継続的に考え、運動していくことだと思います。

木村：高齢者の地域社会へのインクルージョンを考えると、多世代共生に向けて、ハードルの低い参加の場としての「地域での共食」が増えていく、または昔あった祭・行事などが復興されていくことが、共生につながる大事な取組みの一つだと思います。高齢者の方々や高齢期を迎えるすべての人たち（＝私たち）にとって大切なのは、受身の支援だけではなく「積極的な参加」が叶う場所や機会があることだと考えています。

山本：インクルージョンという言葉は流行り言葉としてあちこちで散見されます。ですが、それは一方向的な行いではないはず。「彼らを包摂する」のではなく、包摂できるように「自らが変わる」ということが必要なことではないでしょうか。インクルージョンの結果が単一に包摂された社会状況をもたらすのではなく、インクルージョンの結果、人々の多様性が際立つようになってほしいと思います。

渥美：これからについてはもちろん、未来共創センターで頑張ります、ということです。

私の論文中では共生へのプロセスのことを共創としています。共創という活動の目指す先が共生ですね。その共生する社会が実現したらいいなと思いますし、そのためには共創しますということになります。そのためには大学という一つのカテゴリーに留まることなくいろんな市民の方々といろんな対話をして行きます。広い意味の対話ですね、けんかすることも、絵を見せることも、音楽を演奏することも対話です。そして対話はだいたい上手くいかない。だから繰り返し何回もやっていく。そんな同じ志を持つ人を大学で育てていければうれしいなと思います。そしてそういう人を育てるつもりで、こっちも育ててもらえれば一番ありがたいなと思っています。共生を実現するための活動としての共創をどんどんやっていく場として、このセンターはあるんだと思っています。

お話をうかがって

インクルージョンといっても分野ごとに課題が異なります。福祉の

分野ではソーシャルインクルージョンとして障害者や高齢者の方々が社会参加できるようになることをゴールとします。まちづくりではひとりひとりが認められる場を創り、カテゴリーが流動するような運動をおこすことで、インクルージョンを達成しようとします。インクルーシブ防災では何よりも現場で犠牲になる人をなくすことを第一に「誰もが一人残さず」助かる社会を目指します。教育の分野では民族・歴史の問題の前でインクルージョンそのものの意味が問われています。しかしいずれの分野でもトライアンドエラーの先に共生を模索しているということはできそうです。共生へ向かって、果てしない試行錯誤を繰り返すことが共創であるならば、それはきっと大変なことです。それでも粘り強くトライし続けてきた先生方にならって、私もトライアンドエラーしていきたいと思います。

（織田）